

## 子ども／生徒の声を尊重する実践と議論の探究

—Jean Rudduck と Michael Fielding の概念の接近と議論の違いに着目して—

影山奈々美（東京大学大学院院生）

本発表の目的は、イギリス“Student Voice”研究に位置付く Jean Rudduck と Michael Fielding の実践的研究と議論を通して、両者の概念の接近の様相と議論の違いを明らかにすることである。

Jean Rudduck は、イギリス “Student Voice”研究のパイオニアであり、Michael Fielding は、生徒の声を尊重することを通して民主的な学校の実現を検討してきた人物で、当該研究領域に位置付けることができる。両者は、子ども／生徒の声を聴くことで、学校の構造的変容を促す学校改革を支持してきたという点で、子ども／生徒の役割の重要性を認識し、子ども／生徒の声が聴くに値するものであるという価値を共有する。さらに、Rudduck がコーディネーターを務めた “Consulting pupils about Teaching and Learning : CPTL” (2000–2003) という研究プログラムに共に参加し、両者の概念は接近する。しかしながら、両者の議論は完全なる一致は見られず、Rudduck は「コンサルテーション」を主張した議論を展開し、一方 Fielding は「パティシペーション」を主張する点に大きな相違が見られる。

本発表では、まず、Rudduck と Fielding の実践的研究を概観し、次に CPTL に着目して各々が主張する概念の接近について探り、最後に両者の議論の相違点を辿ったのち考察を行う。Rudduck と Fielding の議論を辿ることで以下の点が明らかとなった。

第一に、学校改革における子ども／生徒の役割の重要性を認識し、子ども／生徒の考えを尊重するという志向の支持は、学校の文脈に応じた「学校改善」「学校創造」を行う上で非常に重要であるという点である。

第二に、Rudduck が主張する「コンサルテーション」概念だけでは、子ども／生徒の声を聴いたとしても、教師の価値観や志向枠組みで判断される可能性があり、そこに「コンサルテーション」概念の限界が見出されるという点である。これを乗り越えるために、Fielding が主張する「パティシペーション」概念との接続が考えられる。

第三に、教師の枠組みを超えた創造的な実践を可能にするであろう「パティシペーション」概念においては、教師と生徒のパートナーシップという関係性の哲学のもとで、教師と生徒が、特定された問題についてディスカッションする過程が極めて重要であるという点である。この過程を経ることで、生徒の実質的な参加を可能にすると考えられる。